

1

京都の六斎念仏「四つ太鼓」が
地域と学校をつなぐ

小学校教員であった筆者は、六斎念仏の「四つ太鼓」を学校の音楽科教材として、伝承者から体験的に学ぶという実践を始めました。図らずも変化がおこり、「京都の六斎念仏」活性化の一因につながっていたのではないかと、という事例を報告します。実践過程で書き留めた子どもの言葉や保護者の思いをよりどころに、何が地域とつなぐことに結びついたのかを考察・検証します。

1

「京都の六斎念仏」との出会い

六斎念仏は、平安時代中期、仏教上、不吉なことが起きるとされる六斎日（毎月8日、14日、15日、23日、29日、30日の6日）に、空也上人が托鉢の鉢や瓢箪をたたいて歓喜踊躍しながら念仏を唱え洛中をめぐる鉢叩き念仏に由来するとされています¹⁾。時代とともに大衆の嗜好に応じて変化しながら今日も各地で伝承されています。ここでいう「京都の六斎念仏」は、国指定重要無形民俗文化財・ユネスコ無形文化遺産の指定を受けて、今日、市内15の保存団体²⁾で伝承されているものです。宗教色の強い「念仏六斎」と宗教色が薄れ芸能化した「芸能六斎」があります。六斎念仏独特の四つの太鼓を打つ太鼓芸「四つ太鼓」は、芸能六斎の基礎となる演目です。

筆者は、1979年から京都教育大学附属桃山小学校教諭として、「はじめに子どもありき」と何事も子どもの側にたつ教育学者の重松鷹泰が提唱する「創造性教育」³⁾に基づく小学校音楽科教育研究に取り組んでいました。その理念に沿って見直しますと、筆者の従来型授業では音楽の得意な子しか活躍していないということに悩んでいました。太鼓を教材にした時だけは、クラス全員が音楽を楽しむ姿になることを実感していました。そんな時、1999年に京都教育大学小林幸男准教授

のお声がけで、同大で開催された日本民俗音楽学会で実演された京都の六斎念仏「四つ太鼓」に出会ったのです。衝撃でした。幼児から高齢の大人まで、個性あふれる打ち方が楽しめる「四つ太鼓」を、何としても「郷土の民俗芸能」の教材にしたいと強く思いました。

翌年度から現職のまま京都教育大学大学院へ進学しました。民俗芸能の教材化を研究テーマとし、垣内幸夫・小林両教員の指導下で、現場での授業実践を積み重ねながら研究を進めました。

2

学校における「四つ太鼓」教材化の
実践活動

修士論文の題目は「小学校音楽科における民俗芸能教材化の試み～京都中堂寺六斎念仏を例とし



図1 「四つ太鼓」を練習する子どもたち

て～」です。民俗芸能の教育的意義や、教材化の視点を明らかにし、これからの時代に合う運営を研究課題とすることを結論としました。「四つ太鼓」の実践は、子どもが本来持っている「楽しいからもっと学びたい」という自主・自発的な「やる気」を大いに伸ばしました。その中で発見した、教師にとっての重要な実践ポイントを次にあげます。

(1) 学校現場で伝承者から直接学ぶこと

フィールドワークにより伝統芸の奥深さを学ぶうちに、これは自分で教えられない、伝承者を学校に招いて子ども達に直接に教えてもらわねばと思いを固めました。「中堂寺六斎念仏」⁴⁾の橋本治夫会長に外部講師を依頼して、小学校4年生を対象とする音楽科授業を始めました。橋本会長は、保存団体が当時使用していなかった立派な四つ太鼓を、学校に運び入れて実演してくださいました。伝承者の打ち方はとても速くて迫力があり、手をしならせ身体全体で踊りながら強弱をつけて表現されました。その息づかいや身のこなしは、たちまち子ども達の憧れになりました。

「四つ太鼓」の伝承は、本来口伝だけで行われます。橋本氏は、学校で子ども達に指導するために、太鼓の打ち方や口唱歌の歌い方を書いた自作楽譜を配布されました。子ども達は、いつも口唱歌を歌って四つ太鼓をエアで指差しながら練習し、覚えたら実物の四つ太鼓で練習しました。

(2) 学校側の反応「学校で念仏と名の付くものをやってええの? (京ことば)」

2006年、子ども達が夢中になって「四つ太鼓」に取り組み始めた頃、研究発表全国大会に向けての準備会の時、他校教諭から質問がありました。筆者の授業タイトル「京都の六斎念仏『四つ太鼓』」を見て、「学校で念仏と名の付くものをやって良いのでしょうか」というお尋ねです。私はすぐに、2005年に開催した「こども六斎教室成果発表会」のプログラム(後述)を取り出し、京都

府・市教育委員会の後援を受けていることや教育長の祝辞を示して、芸能六斎に宗教性はないことを納得してもらいました。その後は誤解を避けるために、芸能六斎「四つ太鼓」に統一しました。

(3) 学校教員の役割

外部講師を招く授業の場に継続的に立ち会うと、筆者は学校教員としての役割が明確になってきました。学校教育であるからには、学習目標の明確化が必要です。何のためにそれに取り組むのか、各自の目標をしっかりと持たせると、子どもは次のように学びを進めました。

「四つ太鼓は友達と一緒に練習できるから楽しい」「どうしたらあんな風に叩けるのか考えて、打ち方の工夫がうれしい気持ちでできます」

「下の学年の子に教えるために、きちんと教えてあげたいので、伝承者のようにがんばります」。

以上は、「四つ太鼓」に取り組む子ども達の声です。学習指導要領が求める「主体的、対話的で深い学び」をいかに重ねているかが読み取れます。

3 学校の体験が保存会入会につながる

(1) 民俗芸能を教材にして育つ子どもの変化

「清水寺へ行ったら会長さんが六斎の説明をしながら他の演目をいろいろみせたはった。たくさんあってびっくりした」「夏休みに、地藏盆で演じられる小山郷六斎を見た。私達の四つ太鼓とは少しちがった。やさしい音で上品な感じがした」

学校で四つ太鼓を体験しているからこそ聞くことができる子どもの言葉です。家族揃って六斎念仏を見に行った夏休みの自由研究には力作レポートがたくさん並びました。ここには、その子らしい深い学びがあると感じとれました。

(2) 「伝統文化親子教室事業」の活動

変化が感じられるようになった頃、会長さんから文化庁の「伝統文化こども教室事業」(後の「伝統文化親子教室事業」)が2003年から開始されることを聞きました。この頃は少子高齢化が進

み、このまま何もしなければほとんどの六齋念仏保存会が衰退の危機を迎えるという時でした。その事業の目的は「担い手の継承を目指した伝統文化普及啓発」でした。ちょうど「六齋芸をもっとやりたい」という子ども達の受け皿がほしいと思っていた時でした。筆者は早速これに応募し、一般有志として教室を立ち上げました。学校が休みの時に学校を会場として六齋を練習する教室です。学校の音楽の授業では「四つ太鼓」を教材にした教育を続けながら、休日に、この教室でさらに一歩進めた二つの演目「猿回し」「越後さらし」に取り組みました。

この「伝統文化親子教室事業」では発表会に予算が付きまして。発表会なのでプログラムが必要でした。早速、京都府・市教育委員会の後援をとり教育長の祝辞もいただきました。先述のように、教育現場では念仏という言葉にとらわれて教師個人で意見を述べてもすぐに潰されかねない場合に、お墨付きが得られました。教育現場にとっては有難いプログラムができました。筆者が小学校音楽の授業で「四つ太鼓」を教材にしていることが毎年のプログラムと場内アナウンスで8年にわたり紹介されました。そういった繰り返しの周知啓発も、学校で六齋念仏をやってもよいという追風につながったのかもしれませんが。

その後、小学校の総合的な学習の時間や社会科の地域学習にも、「四つ太鼓」をはじめとして芸能六齋の演目も学校で練習されることが増えました。もともと民衆の間で伝承され育まれた芸能です。学校で「四つ太鼓」体験した子どもが夢中になり、その姿を見て大人も背中を押されるように保存会に入会していく様子が頻繁に見られました。

(3)「こども六齋」の活動

「伝統文化親子教室事業」への参加団体は、2024年現在10団体です（1団体は発表会出演休止中）。

2022年、「第46回シアター公演 民俗芸能を担う若者たち—京都こども六齋教室—」⁵⁾によれば、

現在10団体ある「こども六齋教室」のほとんどが、小学校を練習場所としています。

学校の社会科地域学習で伝承者を招いて「四つ太鼓」をみんなで体験したり、総合的な学習で六齋について調べる支援をしたりするなど何らかの形で、まず学校の教科学習につなげることで「こども六齋教室」への入会者は増えていくでしょう。なぜなら「四つ太鼓」という芸能に教育的意義があり、とても面白いからです。

「合わせるとう気持ちよくなるしすっきりする。お姉ちゃんの部活みたいで迫力あるしおもしろい」

「低学年の頃は、できたときの達成感があっておもしろいと思いました。高学年になって教えたができるようになってうれしくて、もっとおもしろくなりました」

これらは、芸能六齋を練習している子ども達が六齋の魅力について書いた記録です。実際に練習しているからこそこの言葉が出てきます。この声を聞くと、誰しも、もっと子ども達を応援したいという思いが募ってくるのではないのでしょうか。

また、次のような保護者の声もあります。「毎日、友達に声をかけて太鼓の練習に音楽室へ行ってたようです。自分で考えて行動するようになりました。成長した我が子の姿に感動しました」「他の習い事は休みたいというのに、六齋は休みたいといったことがありません。下の学年の子がいるからしっかり行動したいと思っているようです。親子共々、伝統文化に興味を持つようになりました」「教えてくださる保存会の方々のおかげで、六齋に対して真摯に向き合う姿勢が見られるようになりました。家でも、ダンボール箱にマルを書いて『四つ太鼓』の練習をしています」

こういった保護者の声の中には、「伝統文化に育まれる子ども」の姿が見えます。

現在の伏見桃山子ども六齋教室では、中堂寺六齋念仏保存会の塩見昌也、橋本雅文両氏に指導をいただいています。また、何かと関わりのあった京都教育大学田中多佳子教授編著『アクティブに楽しく学ぶ世界の音楽』⁶⁾には、筆者や両氏の協

力の下に「口唱歌に合わせて四つ太鼓をたたこう」の項目が掲載され、地域を超えて「四つ太鼓」の実技指導の方法や学び方を動画とともに知ることができるようになりました。

4 地域と学校をつなぎ活気づく 京都の六齋念仏

冒頭で述べましたように、これはマネジメントというようなものではありませんが、四つ太鼓にとりつかれた筆者が行ってきた諸活動が、あくまで結果論として、学校と地域をつなぎ、この芸能の活性化につながったと言えます。

以下、その過程を振り返り分析します。

学校教育として「四つ太鼓」の練習を始めたことで、女子も参加が可能になりました。学校で練習した「四つ太鼓」が面白くてもっと究めたいと気持ちが強まり、地元の六齋保存会に入会する子どもが増えました。保護者も子どもを通して六齋念仏に強い関心を抱くようになりました。芸能に関心をよせる人々の裾野拡大に貢献しています。

今年（2024年）8月12日午後7時からの京都中堂寺六齋念仏棚経⁷⁾を見学してきました。

2000年にフィールドワークした頃と比べて、演者数は2倍以上に増加。小、中、高校生が半数を占め、笛の演奏者は、ほとんどが女性でした。つまり、子どもと女性の参加が大幅に増えました。保存会会員増加のおかげで、演目も増え、音量も大きく豊かになりました。「こども六齋」から鍛えあげた若者の参加を得て、まさに芸能が活気を取り戻し、地域と学校がつながった姿と言えますでしょう。

地域と学校をつなぐポイントは次の3点と考えます。

まず第1に謙虚であること。自分の物差しで取り組むのではなく、伝承者に「教えてください」という姿勢をもつことです。例えば、「テンテントコトコ」は4分音符2つと8分音符4つではないのです。西洋音楽の拍の流れではありません。「テンテン トコトコ——」という風に自分

の想いに合わせて伸びたり縮んだりします。楽譜ではなく、口唱歌で伝承された太鼓ですから、その伸ばし方や縮め方は人によって違います。このことが、子ども達にとっては、自分の表現を活かすことになるのです。個人の工夫は誰にも否定されません。子どもの自己肯定感を育てることにともなっています。

第2に相互理解に努めること。躓いた時は互いに相手の立場に立って歩み寄る。そうしていると見えてくるものがあります。

第3に伝承者に感謝の気持ちを持つこと。それが互いにとって心地よい雰囲気を作ります。そこが自己実現の場と考えるなら、さらに互いの思いが通い合うのではないのでしょうか。

- 1) 植木行宣「京都の六齋念仏」（芸能史研究会編集『京都の六齋念仏』京都市文化観光資源保護財団，1982年）5頁。さらに植木は、「六齋日に行われた踊り念仏に源流を求め、踊り念仏の娯楽化を中間項として、現在の六齋念仏につながるのが一般的であるとしているが、これはつまり、六齋念仏について何一つ分かっていないということである」（6頁）、「芸能的六齋は『六齋』と称する芸能である。一種のバラエティ」（18～20頁）と記している。
- 2) 15の「京都の六齋念仏」保存団体とは、念仏六齋を主とする、西方寺六齋念仏保存会、上鳥羽橋上鉦講中、六波羅蜜寺空也踊躍念仏保存会、田中村六齋念佛保存会、円覚寺六齋念仏講の5団体と、芸能六齋を主とする、久世六齋保存会、吉祥院六齋保存会、桂六齋念仏保存会、中堂寺六齋会、壬生六齋念仏講中、西院六齋念仏保存会、梅津六齋保存会、嵯峨野六齋念仏保存会、小山郷六齋会、千本六齋会の10団体がある。
- 3) 弓野憲一「京都教育大学附属桃山小学校音楽実践『世界の創造性教育』ナカニシヤ出版，2005年（3～8頁）。
- 4) 中堂寺六齋念仏とは京都市下京区の中堂寺地域で行われている「京都の六齋念仏」の一つ。
- 5) 2022年3月6日に佛教大学宗教文化ミュージアムで開催予定された第46回シアター公演のプログラム『民俗芸能を担う若者たち—京都こども六齋教室—』。コロナ禍のため公演は中止。
- 6) 「口唱歌に合わせて四つ太鼓をたたこう」田中多佳子編著『アクティブに楽しく学ぶ世界の音楽—組み合わせで使える教材ユニット集』（音楽之友社，2023年）77～79頁
- 7) 棚経とはお盆行事の一つ、「魂祭の馳走」。夕刻から家々を回って、死者の魂を六齋芸でもてなす。お布施の金額によって演目が増減され保存団体維持の重要な収入源となっている。

（藤田加代）